



泗水図書館 ☎ 0968 (38) 6866
中央公民館図書室 ☎ 0968 (25) 1672
七城公民館図書室 ☎ 0968 (25) 1580
旭志公民館図書室 ☎ 0968 (37) 3111
内線 303

閉館日・閉室日

泗水図書館 月曜日・月末・祝日
中央公民館図書室 火曜日・第1日曜日・祝日
七城公民館図書室 日曜日・祝日
旭志公民館図書室 日曜日・祝日

菊池市図書館ホームページ <http://www.kikuchi-lib.jp/>

司書のつぶやき

残暑も図書館(室)で楽しく過ごしませんか？

メロン



新着・お薦め図書

泗水図書館

瓶の中 復刻
三国志 外伝
アクアマリンの神殿
読まずにいらぬ名短篇
カウンセラーは何を見ているか
野垂れ死にの覚悟
あっぱれのはらうた
だるまちゃんとやまんめちゃん

高峰秀子 著
宮城谷昌光 著
海堂 尊 著
北村 薫 編
信田さよ子 著
曾野綾子／近藤誠 著
くどうなおこ 詩・文
加古里子 さく／え

中央公民館

地底の科学
くまモン博士、カバさん
クセになるおそうじ術
優しい死神の飼い方
世界でいちばん美しい
バラの城のゆうれい
だれもしらないヒーロー

後藤忠徳 著
永野芳宣 著
本多弘美 監修
知念実希人 著
藤谷 治 著
斉藤 洋 作
きむらゆういち 作

七城公民館図書室

八月の六日間
絵本の風がふくとき
たいくつなトラ
あのほしなんのほし

北村 薫 著
舟橋 元 著
しまむらゆうこ 文
みきつきみ 文

旭志公民館図書室

遺文 吉原裏同心 21
461 個の弁当は、親父と息子の男の約束。
泣けないサボテン
あかちゃんのおさんぽ1

佐伯泰英 著
渡辺俊美 著
なすかつら 文
いとうひろし 作

今昔物語ふぁんたじあ

杉本苑子 著



読書の醍醐味は何と言ってもいろいろな世界を味わえること。本を開くだけでドキドキしたり、心が温かくなったり、涙したり、ヘーッと驚いたり、あまりの理不尽さに憤ったり、恐怖したり、あるいは文章の美しさに導かれて空想の翼を広げ大好きな世界に

遊んだり。何という贅沢。そこでお薦めしたいのが杉本苑子の「今昔物語ふぁんたじあ」。平安時代の終わりに成立した「今昔物語」はインド、中国、日本の1,000余りものお話から成る説話集。その面白さを余す所なく、いやさらに面白く軽妙な文章にのせて私たちに紹介してくれるふぁんたじあ。【鼻】や「藪の中」など芥川龍之介の「今昔物語」も素晴らしく引き込まれる作品ですが、杉本苑子のふぁんたじあもなかなか素敵です。

夏は夜、「今は昔」の物語へちょっとお出掛けになられませんか。

文 岩下美穂子さん(大尺)

耳より情報

☆七城公民館図書室おはなし会☆

七城公民館図書室では、毎月おはなし会を行っています。絵本や紙芝居など、図書室の司書が読み聞かせをします。ぜひお越しください♪

とき 9月20日(土) 午後2時～
ところ 七城公民館図書室



万句の里俳句会 7月例会
蚊帳吊草遊んだ頃の友恋し 稲田 鈴子
梅雨明けてまばゆく夕日ありにけり 野中 公枝
がうがうと天地揺るがす大瀑布 平山 邦子
忙しさをかきたてられし蟬の声 宮本 雅子
食卓にまずは一品冷奴 緒方 朋子
せせらぎ俳句会 7月例会
残されし日を知り鳴くや蟬の声 五丁 義昭
恙身に梅雨明けの報明るくす 村山 数恵
さわさわともろこし畑風渡る 寺本 和子
飛び立つを誘ひ舞ふ親つばめ 服部 静子
梅雨晴れ間傘引きずりて子の歩く 藤本アツ子
旭志文芸教室俳句の会7月詠草
通学路子等を見守り合歡の咲く 芹川のり子
角立ててまいまい塀を登り行く 中尾ヨシコ
耳遠き夫振り返るほととぎす 芹川 蓉子

肥後狂句水笑会 7月例会
風に香のありけり坂のすいかずら 水谷 ミネ
騙されん 今年は下戸の監査官 小川 繁美
見てごらん あざやん美人に化けらした 狩野 本六
この日和 俺には不利な投票日 窪田 明德
レジ袋 又耕運機打つ止めた 田中 孝幸
朝っぱちから 満員になるパチンコ屋 田中レイ子
肥後狂句水笑会 7月例会
回覧板 パスしてくれて言うてある 井手 水光
運動不足 医者のはしごでしのぎよる 続 義昭
鏡 いつも見るのは白髪染め 御手洗三代
鏡 こまか娘が陣取って 宮上 美由
男の料理 薬一皿添えとらす 山隈 好茶
七城短歌会 7月詠草
背戸に棲み決まりて宵口鳴き立つる 雨蛙一つ声のかまし 佐々 重弘
草を抜く庭の傍えに梔子の白花咲きいて薫りたよう 嶋田 晴美

菊池短歌会 8月詠草
隣接の団地の七夕早苗田の水面に影を落とし揺れいる 高木 精
持ち寄りし花はデイ施設の大瓶に溢れて知らざる花に手を添ゆ 池田カツ子
朝の窓開ければ早苗田増す緑にパワ―を貰い今日が始まる 木下 陽子
高齡者大学文芸部 7月歌会
日脚延びまだ暮れやらぬ夕まぐれ満月すでに白く光れり 岩根 博恵
雨風にポタリと落ちし夏椿はかなき姿しはし見つめる 田中 遙子
わが畑の収穫したる玉葱を人の手借りて吊すは哀し 川口 敦子
芋蔓の物干竿にからみつく今日は切らむと躊躇ひ見あぐ 宮本サチ子
故郷の墓参済ませし夕暮れの車窓に映る淡きわが顔 北村 玉恵
菊池短歌会 8月詠草
良薬を師事に従ひ呑む程に二週間目の医師の類笑み 岩木 妙子
「どうしてる？」案じてくるる友の声 梅雨こもる日に薔薇が溢るる 岩永 典子
手をつなぎ丸い輪作ろう力合わせとるにも足らぬ争いやめて 古賀 勝士
孫就職の合格メール届きたり家族揃ひて歓声を揚ぐ 中川 愛子



庭の樫新梢伸びて屋根を抜く鎮もる
夜半の星座輝け 中原ちえ子

お詫びと訂正

広報きくち8月号28ページの文芸きくちで、万区の里俳句会の句に誤りがありました。申し訳ありませんでした。正しくは次のとおりです。

誤 目盛りもかまはず次の札所まで 中路 郁子
正 日盛りもかまはず次の札所まで 中路 郁子

